

## 音別海岸の植生とその保全の意義

新 庄 久 志\*

### Vegetation of Onbetsu Coast and Importance of its Conservation

Hisashi SHINSHO\*

#### はじめに

日高支庁襟裳岬の海岸で、昆布の生育が回復しつつあるという報告があった。植林事業が実を結び、それまで裸地同然であった沿岸地帯が緑化され、海への土砂の流入が減少して、昆布の生育地が良好に転換したというものであった。カナダからは逆に、森林の激減によって沿岸からサケが姿を消したという報告があった。パルプ用材などのために森林の伐採が進み、そのために土砂が河川や河口に

流出し、サケの産卵適地が消滅したというものであった。

一方、海岸における海藻の生育促進のために、苗床としてコンクリートブロックを海底に沈めるが、そのブロックに鉄分を付着させると海藻の生育に効果があるという報告もあった。これは、多量に鉄分を含んだ水を河川や河口付近の海岸に供給する、臨海地帯の湿原の機能のひとつを示唆するものであった。

釧路から西にむかってほぼ一直線に砂浜海岸がのびる。そのうち、釧路支庁と十勝支庁



図一 音別海岸の保全対象地

※釧路市立博物館 (Kushiro City Museum, Kushiro, Hokkaido)

のはほぼ境界、音別川とキナシベツ川が太平洋に流下する海岸域に、当地方の海岸線を代表する自然植生が残っている。砂浜・砂丘地の亜寒帯系植物群落、背後の塩湿地および湿原植物群落、そしてこれらの周囲の海岸段丘をうめる広葉樹林、針広混交林である。

北海道東部の海岸線は釧路から東側では、自然公園や魚つき林、土砂防備林などの保安林、鳥獣保護区などによってその自然が保全されているが、西側はほとんど保全の網をかぶっていない。

1992年、ブラジルで開催された「地球環境会議」以来、地球規模で環境保全への取り組みが展開している。種、遺伝子とともに生態系を保全することを目的とする「生物多様性条約」が採択され、「世界遺産条約」にわが国も屋久島、白神山地などを対象地としてリストアップした。1993年6月、釧路市で第5回締約国会議が開催された「ラムサール条約」も、湿地の保全を通じて地球環境の回復に貢献しようとするものであった。

音別海岸に残る数少ない自然植生を保全する取り組みは、その生態系の価値を見なおした土地所有者と地域の人々、そして日本全国の自然の保全に取り組む「社団法人 日本ナショナル・トラスト」の協力によってスタートしている。海岸の生態系を保全しつつ、その自然資源を賢明に、持続的に活用する。その手法を明らかにすることを通じて、地域から地球環境保全に貢献しようとするものである。この取り組みは、今後の北海道東部の自然保全に新たな方向を示すものになると思われる。

対象となる音別海岸の植生について予備調査を実施したので、その結果と保全の意義について紹介したい。

### 対象地 (図-1)

音別海岸は、北海道東部、釧路から太平洋沿岸にそって西に約50km、釧路支庁と十勝支

庁の境界付近に位置する。太平洋に面する幅150m内外の平滑な海岸線で、砂浜・砂丘地がのび、背後に海拔40～80mの海岸段丘が位置する。また、海岸段丘の間をキナシベツ川、直別川が太平洋に注ぎ、その流域に塩湿地・低湿地がひろがる。

保全の対象地は、キナシベツ川、直別川流域のヨシースゲ類群落、ハンノキ湿地林の分布する低湿地、その前面に帯状に展開するハマニンニク、ハマナスなどが優占する砂浜・砂丘地の海岸草原、砂浜・砂丘地、低湿地をはさんで、東西に位置する海岸段丘のミズナラ、ダケカンバが優占する天然更新二次林およびミズナラ、イタヤカエデ、ヤチダモ、シナノキなどの優占する自然林である。

### 対象地の植物群落

#### 1. 砂浜・砂丘地植物群落 (表-1)

砂浜・砂丘地は、最大幅150m内外、延長1,500m内外で、高さ3m内外の小規模な砂丘が2列並列する。

植物群落は、汀線に平行して幅80～100m、延長1,000m内外の規模で帯状に展開する。ハマニンニク、ハマナス、マルバトウキなどが優占する海岸草原で、汀線に近い砂浜および砂丘の前面ではシロヨモギ、エゾノコウボウムギ、ハマボウフウ、ハマニガナ、ハマエンドウ、ハチジョウナ、エゾノコウボウシバ、ウンラン、エゾオグルマなどが高い頻度で出現する「ハマニンニク-シロヨモギ群落」が占める。

砂丘地の後面では、ハマニンニク、ハマナス、マルバトウキ、ハマニガナ、ハマエンドウに加えて、エゾノヨロイグサ、センダイハギ、エゾノシシウド、マイヅルソウ、ナミキソウ、シオガマガク、ヒメイズイなどをともなう「ハマニンニク-ハマナス群落」が位置する。

その背後の砂丘地では、コケモモ、ゼンテイカ、ハナイカリ、ツリガネニンジン、エゾ

コゴメグサ、ガンコウラン、ノハナショウブなどが混生する「ハマニンニク・コケモモ群落」が占める。なかでもコケモモ、ガンコウラン、ハクサンチドリ、マイヅルソウ、チシマセンブリなどの存在は、亜寒帯に属する北海道東部の海岸植生を特徴づけており、これらは同時に海洋性北方植物としても位置づけられる。

砂浜・砂丘地植物群落は、構成種が60種内外で、当地方の海岸を代表する植物群落である。

## 2. 低湿地植物群落

砂浜・砂丘地の背後に位置するキナシベツ川、直別川流域の低湿地には2種類の湿生植物群落が分布する。

第一は、砂丘地のすぐ背後、砂丘地に平行して流下するキナシベツ川河口近くの流域にひろがる塩湿地植物群落である。イヌイが優占し、エゾツルキンバイ、エゾミソハギなどが混生する。満潮時には逆流する海水の影響を受けるとされる立地である。ハマナスがパッチ状に点在し、センダイハギ、ハマフウロ、ゼンティカ、マルバトウキ、エゾノシシウド、ノコギリソウ、エゾノレンリソウ、エゾノコンギク、アキノキリンソウなど砂浜・砂丘地海岸草原の構成種が出現する。同時に低湿地草原の構成種であるサワギキョウ、タチギボウシ、コウヤワラビ、ヒメシロネ、アカネムグラ、ヤナギトラノオなどが高い頻度で混生する。他にヤマドリゼンマイが草丈80cm、径1～2mのパッチ状に点在し、ナガボノシロワレモコウ、エゾリンドウなども散生する。

第二は、塩湿地植物群落の背後にひろがるヨシースゲ類群落である。キナシベツ川に連続する伏流水が流れ、一部が冠水している低湿地にはヤラメスゲが帯状に群生し、クロバナロウゲ、ドクゼリ、ヌマゼリ、オオカサスゲなどが混生している。水位は高い。ヨシは

草丈160～170cm、優占度2、群度2でそれほど密生しない。スゲ類はヤラメスゲが優占し、草丈90cm内外、優占度3、群度2で、他にイワノガリヤス、クサヨシ、ミゾソバ、アキノウナギツカミ、サワギキョウ、ハッカなどをみとめ、水位は、地表面から－5cm内外である。

塩湿地から数100m内陸へと離れたヨシースゲ類群落では、ヨシがやや密生し、ウメバチソウが高い頻度で混生して、コウヤワラビ、ヤナギトラノオ、ナガボノシロワレモコウ、ヒメシダ、ヒメシロネ、エゾミソハギなどをみとめる。水位は、地表面から－10cm内外で、やや低い。冠水する立地にはオオミズゴケ、ウロコミズゴケなどが繁茂している。

表－1 砂浜・砂丘地植物群落

|             | ハマニンニク<br>イシロヨモギ群落 | ハマニク<br>ハマナス群落 | ハマニク<br>コケモモ群落 |
|-------------|--------------------|----------------|----------------|
| 調査区数        | 12                 | 12             | 12             |
| 標徴種および識別種   |                    |                |                |
| ハマニンニク      | V                  | V              | IV             |
| ハマナス        | V                  | V              | V              |
| マルバトウキ      | IV                 | IV             | V              |
| シロヨモギ       | V                  |                |                |
| エゾノコウボウムギ   | V                  |                |                |
| ハマボウフウ      | V                  |                |                |
| エゾオグルマ      | I                  |                |                |
| ハマニガナ       | V                  |                |                |
| ハマエンドウ      | V                  |                |                |
| エゾノヨロイグサ    | I                  |                | V              |
| センダイハギ      |                    | V              | V              |
| エゾノシシウド     |                    | V              | II             |
| マイヅルソウ      |                    | V              | I              |
| ナミキソウ       |                    |                | III            |
| シコタンキンボウゲ   |                    | IV             | III            |
| シオガマギク      |                    | III            | V              |
| ヒメイズミ       |                    | I              | V              |
| コケモモ        |                    |                | V              |
| ゼンティカ       |                    |                | V              |
| ツリガネニンジン    |                    |                | V              |
| エゾコゴメグサ     |                    |                | III            |
| ガンコウラン      |                    |                | II             |
| ノハナショウブ     |                    |                | I              |
| ハナジョウナ      | III                |                | I              |
| エゾカワラナデシコ   | I                  |                | II             |
| 随伴種         |                    |                |                |
| ノコギリソウ      | V                  | V              | V              |
| イワノガリヤス     | I                  | V              | III            |
| オオヤマフスマ     | I                  | I              | IV             |
| ナガハグサ       | I                  |                |                |
| シロツメクサ      | I                  |                |                |
| エゾフウロ       |                    | V              | V              |
| ウシノケグサ      |                    | V              | III            |
| オオヨモギ       |                    | V              | II             |
| エゾトリカブト     |                    | IV             | II             |
| ヒオウギアヤメ     |                    | III            | V              |
| アキノキリンソウ    |                    | III            | V              |
| ヤマアワ        |                    | I              |                |
| オオカサモチ      |                    |                |                |
| ナガボノシロワレモコウ |                    |                | V              |
| ヒメシロネ       |                    |                | IV             |
| ヒメシダ        |                    |                | IV             |
| エゾフユノハナワラビ  |                    |                | IV             |
| エゾクサイチゴ     |                    |                | IV             |
| キジムシロ       |                    |                | III            |
| タチギボウシ      |                    |                | II             |
| ヤマドリゼンマイ    |                    |                | II             |
| ヤブマメ        |                    |                | II             |
| ベビノゴザ       |                    |                | II             |
| エゾリンドウ      |                    |                | II             |
| ツマトリソウ      |                    |                | II             |
| エゾオオバコ      | III                |                | IV             |
| ヤナギタンポポ     | I                  |                | V              |
| サワギキョウ      |                    |                | I              |
| ネシバナ        |                    |                | I              |
| コウゾリナ       |                    |                | I              |
| ヤマハハコ       |                    |                | I              |

常在度(出現頻度)

I : 1～20%  
II : 21～40%  
III : 41～60%  
IV : 61～80%  
V : 81～100%

### ハンノキ林

海岸線から700m内外、内陸に入ったヨシースゲ類群落の低湿地に、樹高16~18m、胸高直径30~40cmのハンノキの高木林が分布する。樹冠が互いにつながった屋根状の林冠を形成している。林内には樹高180~200cmのノリウツギが10数本の幹を林立させて叢株をつくり点在する。他にカラコギカエデ、マユミなどの低木も散生する。

林床にはカブスゲが高さ30~40cmに発達した叢株をつくり、叢株上にヤマドリゼンマイが群生し、ホザキシモツケ、エゾメシダ、ゼンテイカなどが株上に混生している。他にタチギボウシ、ヨブスマソウなどが混生し、丘陵地に隣接する立地では、エゾミヤコザサが混じってくる。

ハンノキ高木林がヨシースゲ類群落と接する林縁には、樹高18~20m、胸高直径30~40cmのハンノキ大径木の立ち枯れが点在する。根元に10数本の萌芽が密生している。他に樹高10~12m、胸高直径15~20cmとやや小型のハンノキも枯損木になり、萌芽をともなって点在している。

また、枯損木が点在するハンノキ林分とヨシースゲ類群落の境界付近の低湿地には、樹高160~170cm、胸高直径3~5cmの樹幹を3~5本林立させた、ブッシュ状のハンノキも点在する。いずれも根元に、すでに朽ちた樹幹直径15cm内外のハンノキ樹幹の痕跡がある。当該地のハンノキ林も他の湿原の湿地林と同様に、萌芽による樹林の天然更新を行なっているとみとめられ、更新の時期は、胸高直径15~20cmで枯損となる林分と、胸高直径30~40cmの林分とに分けられる。

丘陵地に近い低湿地のハンノキ林には、樹高25m内外、胸高直径20cm内外のヤチダモが混生し、その林床には、エゾミヤコザサ、エゾヤマハギ、エゾオオヤマハコベ、オオハンゴンソウなど、丘陵地湿潤地の構成種が出現する。

### 3. 海岸段丘二次林

キナシベツ川左岸、海岸線の東に位置する海拔40~56mの海岸段丘には落葉広葉樹による天然更新二次林が分布する。樹林は海岸線から200m内外内陸に入った段丘上に展開する。

樹林の前面域はエゾミヤコザサが優占する海岸草原が占める。海岸草原は群落高30cm内外で、エゾミヤコザサが優占度4、群度2、樹林域に近づくと群落高が50cm内外に高くなる。イワノガリヤス、オオヨモギが高い頻度で混生し、エゾススキが株をつくって点在する。他にヤマアワ、シラヤマギク、ワラビ、ヤマハハコ、ツリガネニンジン、ヤマブキシヨウマ、オオカサモチ、エゾトリカブト、エゾフウロ、クルマバナ、シオガマギク、キジムシロ、サイハイランなどが混生し、ハマナス、エゾヤマハギ、エビガライチゴ、オニツルウメモドキなどを加えて、当地方の海岸段丘を占める海岸草原の構成種が出現する。

また、海岸段丘が海に面する斜面のうち、表土が露出している崩壊地にはコハマギクが群生し、エゾコゴメグサ、ユキワリコザクラなどがみとめられる。

海岸草原と樹林の境界付近にヤチダモの枯損木が目につく。樹高2~6m、胸高直径4~6cmのヤチダモで、いずれも立ち枯れている。一部に萌芽をみとめるが大半はない。広



低湿地、砂浜・砂丘地植物群落

葉樹林の林縁に位置する樹高8 m内外、胸高直径10cm内外のヤチダモは、まだ樹幹を維持している。年輪の生長は5 cm幅で約40年であるから、ヤチダモの枯損木林は推定樹齢20～40年である。林床に草丈50cm内外のエゾミヤコザサが優占度4、群度2で密生し、ワラビが散生している。また、ブッシュ状のケヤマウコギが点在し、マユミも混生する。卓越する海風の影響をうけたヤチダモの枯損木林である。

段丘上の樹林は、ミズナラ、ダケカンバが優占する天然更新の二次林である。ミズナラは樹高10～12 m、胸高直径15～20 cmで、5～6本の樹幹を同一の根から林立させている。伐採後萌芽更新したものである。年輪は5 cm幅で20～30年を数える。したがって、40～70年の推定樹齢であり、伐採後、天然更新が進んでいることを示唆する。中には樹高20 m内外、胸高直径30 cmをこえるミズナラも散生する。

ダケカンバは樹高16～18 m、胸高直径15～20 cm、数本の幹が林立する萌芽型の高木で、中には樹高20 m、胸高直径40 cm内外のダケカンバもある。他にイタヤカエデ、ヤマモミジ、ハリギリ、シラカンバ、ミヤマザクラ、エゾヤマザクラなど、当地方の広葉樹林の主要な構成種が混生している。林内はハシドイ、マユミ、ケヤマウコギ、ノリウツギなどの低木が点在し、ヤマブドウ、ツタウルシ、サルナシをみとめる。草本層には草丈30～40 cmのエゾミヤコザサが優占するが、それほど密生しない。明るい林内である。他にトリカブト、キンミズヒキ、オオカサモチ、ヨブスマソウなどが散生する。ミズナラ、ダケカンバの樹林の林冠が切れてオープンになった立地に樹高4～5 mのヤマモミジが点在し、林床のエゾミヤコザサ群落に、優占度3、群度2でワラビが群生しているのが目を引く。

沢沿いの樹林にはケヤマハンノキ、ヤチダモが混生する。沢地の斜面では樹高25 m内外、

胸高直径40 cm内外のヤチダモをみとめる。低木層にハシドイ、エゾニワトコが散生し、サルナシ、ミヤマタタビなどのつる植物が密生する。草本層は、オニシモツケ、エゾノサワアザミ、ヨブスマソウ、オオカサスゲ、ミゾソバ、クサヨシ、イワノガリヤスなどが群生し、ヤマドリゼンマイ、ミズバショウなど湿生植物が混生して、海岸段丘上部とは異なった林床を構成している。

一方、汀線に面する海岸段丘で風衝林を構成するのはミズナラの矮生林で、海からの卓越風によって内陸にのみ樹枝をのばした偏形樹を形成する。最前線のミズナラの樹高は1.5～2 m、その背後では3～5 mの樹高になり、胸高直径10～15 cmである。

なお、葉の鋸歯が鋭角ではなくカシワに似ており、「カシワモドキ」と称せられる種類に酷似している。林床は、オオヨモギ、ハマオトコヨモギをともしうエゾミヤコザサ群落で、表土が露出する立地には、エビガライチゴがブッシュ状に分布する。

#### 4. 海岸段丘自然林

直別川の右岸、河口の西側の海岸線に位置する、海拔40～86 mの海岸段丘上の自然林である。キナシベツ川左岸の海岸段丘上の樹林は60～70年前に薪炭のために利用された経緯があるのに対して、当該樹林は伐採されたこ



海岸段丘二次林、低湿地植物群落

とはない。ミズナラ、ダケカンバ、イタヤカエデに加えてシナノキ、ハリギリ、カツラ、ヤチダモ、アオダモ、サワシバ、ケヤマハンノキ、ハウノキ、ナナカマド、エゾノバッコヤナギ、ヤマモミジ、ミヤマハンノキ、エゾノバッコヤナギなどと樹林の構成種が多く、トドマツも混生する。樹高20m内外、胸高直径30cm内外のミズナラやケヤマハンノキ、樹高15~20m、胸高直径25~30cmのシナノキ、さらに樹高25m内外、胸高直径35~40cmのトドマツ大径木が点在する。トドマツの年輪は10cm幅で約50年を数え、推定樹齢は100年内外になる。

低木はマユミ、ミツバウツギ、ヒロハノツリバナ、エゾニワトコ、ネムロブシダマ、エゾヒョウタンボク、ミヤマガマズミ、ハシドイなどで、加えてつる植物のツタウルシ、ヤマブドウ、サルナシ、ミヤママタタビ、ツルアジサイなどがみとめられる。

林床は群落高60cm内外で、エゾミヤコザサが優占度3、群度2で分布するが、密生せず、植被率は70%内外とやや低い。他にオシダの叢株が点在する。

また、林床に直径30~40cmの倒木が多く、樹皮には蘚苔類が繁茂している。加えて、林床には、樹高150cm内外のミズナラ、イタヤカエデ、ハリギリ、シナノキなどの稚樹も散生する。

一方、樹林域の中央部には、林床のエゾミヤコザサ群落を欠いた樹林域がある。樹高30m内外、胸高直径60~70cmのヤチダモの大径木が点在し、他にハリギリ、シナノキ、アオダモなどが混生する。樹高15m内外、胸高直径20cm内外のトドマツもみとめる大型の樹林である。林床はオシダを中心とするシダ植物が優占し、当地方では種類の少ない常緑低木、フッキソウが群生する。他にメシダ、シノブカグマ、リュウノヒゲ、ムカゴイラクサなどをみとめる。低木はエゾニワトコ、トガスグリなどが点在し、やや湿潤な立地に成立

する樹林の林床を構成している。

また、海岸草原に近い段丘上には、深さ30~40cmの凹状地があり、ホザキシモツケが群生している。他にヤラメスゲ、イワノガリヤス、エゾリンドウ、サワギキョウ、コウヤワラビ、アカネムグラ、クルマバナ、ヒメシダ、ゼンティカなどをともなう湿性地でその周辺は地面がやや高くなり、エゾノバッコヤナギ、ヤチダモ、ケヤマハンノキによる小型の樹林が当該地を囲んでいる。

内陸から段丘に湾入する沢地には、段丘を水源とする小河川があり、音別川に流下している。深く浸食の進んだ谷地を緩やかに流路が蛇行し、その流域の沖積地に樹高30m内外、胸高直径110cm内外のハルニレ、樹高20~30m、胸高直径120cm内外のカツラの大径木が、樹皮にミヤマノキシノブなどの着生植物をとまって点在する。

さらに、沢の流域が広くなると低湿地となり、ヤチダモをとともなうハンノキ林が分布する。低木層をエゾニワトコ、ホザキシモツケが構成し、オニシモツケ、ヨブスマソウなどの高茎草本、ヨシ、オオカサスゲ、ヤラメスゲなどの草本類が群生する、やや密生した林床になる。また、カブスゲが高さ30~40cmのヤチボウズ（スゲ類叢株）を形成している。

海岸段丘の樹林が海に面する最前線にはダケカンバ、ミヤマハンノキが風衝林を構成し



海岸段丘自然林

ている。内陸側に樹枝をあつめた偏形樹林でバッコヤナギ、ヤチダモ、マユミなどが混生し、ヤマブドウ、サルナシなどが樹冠をおおう。混生するヤチダモには枯損木が多いが、前述の二次林のように単一の林を構成していない。また、海に面する海岸段丘の先端部には、樹高100～200cmに矮小化したエゾノコリンゴの風衝樹が点在している。ダケカンバやミヤマハンノキ風衝林の前面には草丈40cm内外のエゾミヤコザサ群落が占める。群落内にワラビが優占度2、群度2で株をつくって散生し、エゾススキ、ヤマドリゼンマイ、エゾヤマハギも点在する。

また、ゼンマイが一部に叢生し、注目される。釧路・根室地方でゼンマイは、温泉地や内陸のごく限られた立地にのみ分布するので当該海岸段丘上でのゼンマイの自生は興味深い。

表土が露出した海岸段丘の崩壊地にはコハマギク群落がみとめられ、キジムシロ、ユキワリコザクラ、エゾコゴメグサが混生し、イワツツジ、エビガライチゴが点在している。他にヤマハハコ、エゾリンドウ、ヤマブキシヨウマ、ヤマアワ、シラヤマギク、エゾゴマナ、ヒヨドリバナ、エゾカワラナデシコ、ハマオトコヨモギなどが混生して、当地方の海岸段丘上の海岸草原構成種が出現する。

### 保全の意義

音別海岸の特徴は砂浜・砂丘地、低湿地、海岸段丘のそれぞれの立地に、自然度の高い植生が残っていることである。砂浜海岸植物群落、砂丘地海岸草原、塩湿地植物群落、低湿地植物群落、ハンノキ湿地林、天然更新が進む広葉樹二次林、針広混交自然林、さらに段丘上の海岸草原や風衝・偏形樹林が分布している。

これらの多様な植生は、そのまま、かつての北海道東部、釧路・根室地方の海岸線の景観を構成し、同時に亜寒帯の海岸線に生息す

る野生生物のかけがえのないハビタットになっている。また、人的改変の加わらない状態の海岸段丘には、結果として先土器・縄文・擦文時代、アイヌ時代の遺跡を保存することにもなった。

加えて、この安定した生態系は、前述した土砂防備林や魚つき林の機能をも果たし、沿岸の魚類資源の育成に貢献していると考えられ、キナシベツ川流域の低湿地帯は、海藻の生育を促進するとされる鉄分を含んだ水を供給するなど、水質・水量の維持・調節機能も期待される。

音別海岸の保全は、これらの自然生態系に依存する野生生物種の保存、魚類、海藻類などの自然資源の持続的な利用、環境変動の緩和機能などの活用に有効であるし、同時に、一地域に多様で、かつ地域を代表する自然が集中していることは、これらを舞台にさまざまなネイチュア・レクリエーション、自然観察、環境教育などの活動が可能であることを示唆している。幸い、国道、鉄道が隣接し、音別町市街地の郊外であることもあって地の利もよい。

一方、さまざまな環境回復プロジェクトのトレーニング・フィールドとしても最適である。天然更新の進んだ二次林と自然林、さらに海風の影響を受けて成立する偏形樹・風衝林などは、海岸地帯における緑地の復元についての多くの資料を提供してくれる。河川改修の進んだ音別川と、ほとんど自然河川のままであるキナシベツ川は、両者の機能を比較検討するのに好適地である。

現在、北海道東部の海岸線は、いくつかの自然公園、天然記念物指定地、鳥獣保護区、保安林などで保全されている。釧路町の昆布森から尻羽岬、厚岸湖、厚岸海岸から霧多布・浜中海岸までの「厚岸道立自然公園」、根室市の温根沼から風蓮湖および野付半島の海岸線の「野付風蓮道立自然公園」、臨海地帯の湿原は「釧路湿原国立公園」および「天然記

念物釧路湿原」、「天然記念物霧多布泥炭形成植物群落」などに指定され保全されている。加えて、ユルリ・モユルリ島、大黒島など、15箇所をこえる国設、道設の鳥獣保護区が設定され生態系の保全が図られている。しかし、これらの大部分は、釧路から東側の海岸線に集中しており、西側の海岸線は、馬主来沼とその周辺に道設鳥獣保護区が設定されているのみである。

そんな中で音別海岸の自然を保全しようとするNGOによる取り組みがスタートした。対象地の大部分を所有する「榊原農場」と「社団法人日本ナショナル・トラスト協会」を中核とする保全プロジェクトである。

ナショナル・トラスト活動は、産業の進行にともなう自然や歴史的建造物の破壊を防ぐ目的でイギリスに生まれた。1895年「ナショナル・トラスト」が設立され、あわせて「ナショナル・トラスト法」が制定された。現在「ナショナル・トラスト」は、東京都をうまわる土地と230あまりの歴史的な建造物、130の歴史的庭園などを保有し、保全活動を展開している。

わが国では1982年、環境庁に「ナショナル・トラスト研究会」が発足し、1992年、「社団法人 日本ナショナル・トラスト協会」が設立された。イギリスのように全国単一組織による活動ではなく、各地で個々にそれぞれの地域にあった市民団体、自治体などによる活動が展開され、その数は40箇所をこえる。協会は、これらの活動を促進するために必要な調査・研究、情報収集、普及啓発、国内外の団体との提携、ボランティア活動の指導育成、保全事業の実施などを行なっている。

音別海岸の保全については、土地所有者である「榊原牧場」と「日本ナショナル・トラスト協会」が対象地についての「緑地等保存に関する契約」を結び、榊原牧場は「良好な環境の保全を図るため、保全、維持、管理に努めるもの」とし、協会は、対象地の保有に

必要な費用等（協定料）を提供し、かつ、双方が協力し、対象地の保全と有効な利用に努めることとしている。

保全の対象となるのは、前述した砂浜・砂丘地海岸草原の約10 ha、塩湿地・低湿地約105 ha、海岸段丘上の二次林約150 ha および自然林約200 ha、管理・普及啓発活動にも活用できる牧場敷地など約215 ha、総面積約680 ha である。

保全の対象となっている音別海岸の自然生態系の価値や機能を考えると、今後は地域の人々、自治体、関係機関などの参画は欠かすことができないし、当該地の詳細な調査・研究、保全プランの策定、保全事業の実施、レクリエーション・普及啓発活動の展開のための、さまざまな分野、多くの人々のボランティア協力が不可欠である

地域から地球環境保全に貢献しようという気運が高まっている今日、音別海岸の自然保全への取り組みの意義は大きい。関係行政機関やNGOがそれぞれの立場から本ナショナル・トラスト活動を支援し、保全施策を推進することが求められる。

現地の調査等を行うにあたって、榊原牧場榊原源士氏の真摯な御協力を賜った。記して深謝申し上げたい。

## 引用文献

- 新庄久志 1984 道東海岸線の植生 道東海岸線総合調査報告書 p.p.47-86  
釧路市立博物館
- 新庄久志 1987 北海道東部、音別海岸の砂浜・砂丘植物群落 釧路市立博物館紀要 第12輯  
釧路市立博物館